
ぼくらの満足のつくりかた

伊月りさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらの満足のつくりかた

【Nコード】

N7911A

【作者名】

伊月りさ

【あらすじ】

純とみどり。足りないぼくらは不安定な二人暮らしをする。戦争がぼくらから奪ったもの。しあわせとはなんだろう。

1. おはよう

ガラスの外に出たら、そこにある木みたいに、一瞬で動けなくなっちゃうだろうと思う。この先、ふとんから出ることもなんか考えられない。

寒すぎて目が覚めた。あー、寝る前に靴下を履き忘れたからだ。さらさらで冷たい足の裏をこすりつける。まだまだ眠たい。それなのに、ようやく足の寒さが薄れて、もう一度寝ようとするはまだ、足元が冷えだす。さいあく。

ピロピロと鳥が鳴いている。斜め上には朝の光だ。足の裏はまた冷える。どうやらぼく以外は全員、ぼくに起きて欲しいらしい。

右隣から、しゅっしゅっつと空気の漏れるような音もする。ああそうだ、ぼくにいじわるなのがもうひとりいた。

「もう、笑うなよ」

ずんの笑い声は本当に変だ。“ひき笑い”なんて言い方があるけれど、ずんの場合は“おし笑い”だ。声じゃなくて、しゅっしゅっつと変な音で息を出しながら笑う。自転車の空気入れの音みたいだ。

「だって、みどり、もぞもぞしてるんだもん。変な動き方、しゅっしゅっつ。」

そういうずんだって、小さい背中が今すんごいもぞもぞしてるよ。なんて言ったら、ずんの腹筋に悪いだろうからやめておこう。

諦めて左腕で上半身を起こして、ベージュのカーテンをゆっくりあける。低い陽光が、木々の隙間をぬってぼくらの部屋にやってきた。

「まぶし、」

ずんも起きる。真っ黒い髪は、右半分がシャチホコのように反っている。今度はぼくが笑う番だった。なのにつられて、ずんもまた笑った。ずるい。

「あー。いい天気だね」しゅっしゅっつ。

「ほんとうに」

「さて、今日はどっちが洗濯係でしょう」

「なにゆってんだよ、ぼくは昨日やったじゃん」

「冗談だよ、怒らないでよ」しゅっしゅっ。

パジャマを着てるのか着ていないのかわからなくなる。早く着替えないと。

だけどずんと喋りながらじゃ、手の動かし方がわからない。ただでさえ、足りないのに。

どうしようもなくなって、鳥肌をさすりながら、とりあえず二人で笑ってみる。まぶしいことは気持ちがいいから、笑顔で、

「おはよう」

2. いただきます

ぼくは今日も緑色の服だ。せっかくみどりって名前なんだから、
ってずんに薦められて大量に買った緑色のTシャツと緑色のトレー
ナーのほかには、ずんと一緒に住む前に使っていたよれよれのエメ
ラルドグリーンのパロシャツと着古したジーパンしか持っていない。
買い物になんかめったに行かない。

ずんは、白が本当によく似合う。のだけれど、あまりにすぐ汚れ
るから最近はどう着ていない。代わりにこれもまた大量買いした、
まぶしすぎるくらいまぶしい黄色のTシャツやトレーナーを着てい
る。これはこれでよく似合うから、ぼくは好きだ。

ずんのジーパンは、左側はひざから上しかない。買ってすぐに切
っているのを見たときは、もったいない、って思ったけれど、やっ
ぱり邪魔なのだそうだ。まあぼくが長袖を着ないのと、同じ理由だ
ろう。

ぼくは洗い終わった二人のパンツと、三枚の靴下と、二本のフェ
イスタオルを急いで窓の外に干す。冬は洗濯物が少ないから楽チン
だ。外は寒いけれど風が弱いから、太陽のおかげで我慢できなくも
ない。

ばん！

フェイスタオルはちゃんと一回、音をたててのばしてから干す。

「いい天気だと、やる気が出る」

「そりゃ、よかった！」

ずんは椅子に座って、ハムと卵ときゅうりのサンドウィッチをつ
くっている。そでをまくった黄色いトレーナーからのぞく手首が、
器用に動いている。

「うまそう、」

窓を閉めて、小さなテーブルに座る。目の前のずんは、「よし！」
と言って、白い皿の上に四切れのサンドウィッチをおいた。ぼくら

はきちんとパンのみみまで食べるから、それは当然茶色く縁取られている。ななめにカットされた食パンは、きれいに皿の上にたった。

「みどり、洗濯物おつかれさま」

「全然ヨユーだよ。今日はトレーナーがないから、ほとんど力使わなかった」

「でも、水が冷たかったじゃん」

ずんがぼくの左手を握る。ずんの体温が、じんわり肩までのぼってくるみたいだ。

「ありがと、」

「いえいえ」

「はらへった」

「うん、食べて！今日はきゅうりがうまく切れたんだ」

しゅっしゅっ。今日はよく笑う。きつと、お日様も笑っているからだ。

「いただきます」

ずんがつくってくれたホットミルクを飲む。そしてずんのサンドウィッチは、本当においしい。

「ねえ、みどり」

ずんが言いながら、まだ手をつけていない方のサンドウィッチのパンのみみを、5センチくらいちぎってぼくに見せる。

「食べ終わってからだよな？」

「言うと思った」しゅっしゅっ、「いいよ」

「よかった。ぼくの方がはらをすかしてるんだ」

真面目に言ったのに、ずんはお腹をおさえてしゅっしゅっしゅっしゅっと言いつつ出した。まったく失礼なやつだ。

「じゃあ、早く食べよ、すごいピロピロゆってるもん」

「そうだね」

ぼくももう一個のサンドウィッチの耳をちぎった。ぼくらは小鳥が好きなのだ。

3. ようい、どん！

テーブルの上の三つの手のひらにのったたくさんの茶色い破片に、茶色い小鳥が集まってくる。この辺にはたくさん的小鳥が暮らしているけれど、ぼくらに懐いているのはこの種類だけだ。

「くすぐったい、」

しゅっ。ずんが小さく息を吐く。小さな肩をあげて笑い声をこらえている（あんまり笑うと小鳥がびっくりして逃げてしまうから）ずんこそ、小動物みたいだ。このあたりでこんなに鮮やかな黄色い動物は、いまのところずんだけだ。

今日は寒いから、ぼくらはトレーナーの下にTシャツも着ている。明日のずんの洗濯作業がちよつと増えてしまうから我慢するつもりだったのだけれど、ぼくが明日の朝にチャウダーをつくる約束をして、ずんは合意した。ぼくのチャウダーには、小さな角切りにんじんがたくさん入っている。ずんの大好物だ。

ぼくらはほぼ一日中、この小さなテーブルに向かい合って過ごす。小鳥たちは、窓を開けて手のひらにパンのしみをのせていると、勝手に入ってきてくれるのだ。たまに粗相をしていくけれど、こんなに小さな鳥の中から出てくるものなんてたいしたことはない。ぼくらは何日かに一回、こうやって餌付けをする。

窓を開け放して、寒くなってきた、と思った頃に、小鳥たちはきれいに食べ終えて帰っていった。

「パン、まだある？」

ぼくが訊くと、「あとサンドウィッチ一回分くらいは」とずんが答えた。

「めんどうだね」

「めんどうくさいね。どうする？」

「買いに行くよ。まだやめない」

「よかった。ぼくもまだ、みどりと一緒にいたいと思っているん

だ」

ずんは今度は音をたてないで、にっこり笑った。

「ねえ、ずん。窓開けていい？」

ガラス窓の外では、木々がさつきよりも大きく枝を揺らしている。

「あ。ほんとうだ、グッド・タイミング！」

ぼくは立ち上がって、窓を開けた。錐のさきっぽのような冷たい風が、ぼくらの間を通り抜けた。

「わお」

しゅっしゅっ。ずんが嬉しそうに、両肩をさする。

ぼくは椅子に戻り、正面のずんの目をまっすぐに見る。

大きな黒目が、まばたきせずにぼくを見返してくる。その黒の中で、茶褐色の髪の毛が目立つぼくと目が合った。

「いくよ、」

ずんが言う。かけ声はいつも、ずんの役目なのだ。

「よい、どん！」

グッド・タイミング！

ぼくらは吹き込む冷たい冷たい風に交わらせるかのように、ゆっくりと息を吐いた。焦ってはだめなのだ。急がば回れ。このコツを教えてからというもの、ずんの勝つ確率がうんとあがって、ぼくは最近調子が悪い。

ぴゅー！

思わず目をつむりたくなるほどの痛い風がきた。きたぞ、グッド・タイミング！

「あ！」

ぼくが息を吐き出すよりも0カンマ数秒ほど、ずんの方が飛び出しが早かった。これがこのゲームの難しいところなのだ、出だしは早く、吐き出す間はゆっくりと。

ずんの吐いたあったかい息が、フリーザーのような冷気に冷やさ

れる。

きら、きら。もう一度、きら。

黄金色の中に、ピンクと水色も見えた気がする。

「やったあ！」

ずんが両手をあげて喜ぶ。一発で決めるなんて！

「ずん、すごいよ！」

悔しいけれど、ほんとうにすごい。これは風がすごく冷たくないと成功しないのだが、しかし息で氷の粒がつかれるほど冷たすぎると、逆に圧倒されてしまって、出だしが微妙に遅れてしまう。

「よし、もうひと勝負だ！」

「しょうがないなあ、」しゅっしゅっ。

相手のプリズムを見てしまったら、勝負心に火がつく。ぼくらのこの冬のゲームは、ぼくらだから楽しめるのだ。走りまわらなくなつたって、肩で息をするくらいまで必死になって楽しめる。

深呼吸をして、気合を入れた。ずんも息を吸った。

「よい、どん！」

4. だいじょうぶ

正午になると、また風が弱くなってきた。ぼくとずんは思いきり遊んで、きつちりお腹を空かせている。それにしてももうほとんど食糧がない。なんで食べ物には、賞味期限なんていう厄介なものがあるのだろう。

「どうしようか。つくろうと思えばつくれなくもないよ」

ずんが椅子の真横にある大きな木の箱をのぞきこんで言う。今の季節は冷蔵庫がいらないから、通りで拾ったこの箱が大活躍なのだ。

「今なら天気もいいし、行っちゃおっか」

「そろそろ晴れがおわるの？」

「そんなのわからない」

ぼくの声にちよつと戸惑ってから、じゃあ行こう、と、ずんはテーブルに立ってかけてあった焦茶色の杖を掴む。ぼくは急いで立ち上がり、左腕を差し伸べた。ずんが細くてよかった、と思う。ぼくも細いほうだから、もしずんがこれ以上重たかったら、力になってあげられたかわからない。

そんなのは絶対にいやだった。助け合えないなら、一緒にいる意味はなくなっちゃうからだ。

冬の道路は、カッソカッソとうるさい。十分ほど歩いて、スーパーマーケットに行きついた。ここは本当に“スーパー”だ。なんでも売っている。少なくともぼくらが必要とするものは全部。とても便利だ。だからたくさんの人が来る。

「買うのは、」

「パンとミルクとハムと卵とほうれん草」

「あとにんじんもだよ、みどり！」

「そうだそうだ、チャウダーをつくるんだった」

ほんとうにずんは、ぼくのチャウダーが好きなのだ。

何を買うかは、歩きながら何度も確認した。そんなに多くはないけれど、多くはないからこそ買い忘れたら大変だ。冬の買い物なんてそれだけで億劫なのだ。ぼくらは売り場へ直行しなければならぬ。それも周囲から見れば、のんびりと。

ずんは右手に杖を持ち、ぼくは左手に買い物かごを持つ。自動ドアを抜けるときは、いつも緊張する。

「やっぱりどきどきしちゃうね」

しゅっしゅっと言いながら、ずんが左手でぼくに触れる。こら！トクトクが、ばれるのは恥ずかしい。だってこのトクトクは、ぼくの顔を赤らめるものではなく、青くさせる類のものだから。

「……ずんは、」

「ぼくは、平気だよ」

自動ドアが開くか開かないかの距離に立つ。横を通り抜けたおぼさんの目が、邪魔だわ、の「じゃ」まで訴えかけて、すぐに伏せられた。

「やっぱり、強いな、ずんは」

「みどりだって」

「ううん」

正直、ぼくの方が目立たないと思う。

だから余計に情けなく、よわっちく感じてしまう。背筋が寒いのは、冬のせいではないんだ。

さあ、ゆっくりと深呼吸を。

「……だいじょうぶ。行けるよ」

「ほんとに？」

ぼくはこの場面ですんに頷いて、それを何度も裏切ってきた。しかたがない、ぼくには右手に加えて予知能力もないのだ。

けれど今日はなんとなく、確信めいたものがある。ずんの声がいっつもよりも心強い。理屈じゃない。

「うん。だいじょうぶ」

一歩踏み出して、自動ドアが開いた。人工的な冷気の匂いにおそわれる。

カッン。ずんの杖が響く。カッン、カッン、カッン。

間違えたって、ぼくらはだれも呼んじゃあいない。

「だいじょうぶ」

右肩と左肩を寄せて、買い物有成し遂げていく。これもある種のゲームだと思えばいい。

ぼくらは、まっすぐじゃない視線なんかには、負けちゃいけないんだ。

5. いやだよ

買い物に行った後はいつでも、いつまでこうしていただけるのだろうかと、思う。

一番思っではいけない疑問だ。ぼくのタブーだ。

たぶん、今が一番寒い。これを無事に越えて、ピロピロがもっと元気に聞こえるようになって、朝日がもっとやわらかくなる頃に、ぼくらはどうしているだろうか。

靴下を履いた両足を、器用に浮かせながらずんとしりとりをする。床はとても冷たい。ぼくが思い描くよりも、きつとずっと冷たい。

「あさがお」 「おどりこ」 「こま」 「まゆ」 「ゆめ」 「めかくし」 「しろ」 「ろぼ」 「ばけつと」 「とらんぽりん、」

あ！とずんが言うのとぼくがにんまりするのは同時だった。

「ぼくの勝ちだ！」

「あーあ」

ずんはしりとりが苦手だ。ぼくよりもうんと、レパートリーが少ないからだ。

「もう今日は、終わりにしようか」

日がゆっくりと落ちてきている。部屋の寒さにも拍車がかかる。

「ホットミルクの時間にしようよ、ぼくがつくるからずんは座ってて」

「ありがとう」

「どういたしまして」
ぶるっ。

足の裏に触れた床は、やっぱり剣山のように冷たかった。

「はい、どうぞ」

渡すと、ずんはカップからゆらゆらとのぼる湯気に両手をあてる。

「あったかい」

「ミルクのにおいが手についちゃうんじゃない」

「いいね、それ！素敵だよ」

しゅっしゅっ。

顔を近づけると、鼻の先が湯気で湿ってしまった。体に入れたとたんに、ミルクが全身にいきわたるような感じがした。

「おいしい、」

ずんが笑ってくれると、ぼくは嬉しい。

「ねえ、みどり」

ぼくはカップの中のミルクを見ていた目線をあげる。ぴた、と合った目線の奥のずんの瞳が、いつもよりもつやつやに見える。ずんの言いたいことは、ことばよりも先にぼくに飛んできてしまった。

「さっき、スーパールのレジのところで、」

「……ああ、」

また目線をミルクに戻した。ずんの顔を見るのがつらかった。

ずんはきつともう、ざわめくようなあったかい季節を求めている。ない。

「……ねえ、みどり」

「ずんは。ずんは、どうしたい、」

訊いちゃいけないわけじゃないから、訊いてしまった。だけどぼくは訊きたくなんてなかった。

ずんは答えない。

小さな両手で白いカップを包み込んで、うつむいてしまう。

「……ごめん、ずん」

息が苦しい。落ち着かなくなって、冷たい床に足をおろしてしまった。ツン、とした冷たさが脳天までのぼってきて、泣きそうだ。涙の代わりにぼくは言った。

「だけど、ぼくは、いやだ」

ずんが顔をあげた。黒い目の中には、まだぼくがいる。

「……どっちが？」

どっちが？

ずんの眩きが、二人の間でぷかぷか浮いている。

わかってくれよ。ずんは肝心な役目をぼくにやらせたがる。これが、とても強いのに、とても怖がりなずんの性分なのかもしれない。涙を押し戻して、小さく、冷たい空気を吸った。話すことは緊張する。ぼくの周りにいた人たちはみんな、ウソのつき方しか教えてくれなかったから。

「ひとりになるのは、」

無意識に言葉を濁していた。

「いやだよ」

ずんが肯いてくれるのを、ぼくは春まで待てるだろうか。

ずんはぼくを、ほんとうに春まで待っていてくれるだろうか。

6. おやすみ

ずんが、絞ったふきんでテーブルの上をきれいに拭いたら、全部が完了だ。

ぼくらは目と鼻の先のベッドに一直線に向かい、それぞれふとんに倒れこんだ。しゅっしゅっしゅっ。ぼくらにとって、これはとても幸せな瞬間だ。冷やされたふとんの上に二人でいると、体温がふとんに吸い取られているみたいな気分になるけれど、その一体感がなんとも心地がいい。

ぼくらはホットミルクで胃が満たされているうちに眠りにつく。世間では一日には朝食、昼食、夕食の三食をきちんとするのが健康的らしいが、それが物理的に可能な人なんてこの世にどれだけいるんだろう。

「ねえ、ずん」

右隣のずんは、器用に布団にもぐりこんでいる。何度見てもかわいらしい。

「このさき、ぼくがどうするかはわかんない」

「当たり前だよ、みどりは神様じゃないんだから、」
しゅっしゅっ。かけ布団が揺れる。

「わかんないけど、ぼくがこうしたい、ってのはちゃんとあるんだよ」

「みどりが？」

「うん。うそじゃない」

右半身を、ずんの左半身にぴったりとくっつける。

トク、トク、トク。ずんが耳を澄ましているのがわかる。トク、トク、トク、トク、

「……しんじておくね」

びっくりして、ぼくは思いつきり目を見開いてしまった。その顔を見て、ずんがしゅっしゅっしゅっと言う。ずんはぼくの驚いた顔

を見るのが大好きなのだ。肩を縮こまらせて、しゅっしゅっしゅっしゅっ。一日に一回はいたずらをしないと気がすまないのか、今日は珍しく何もしてこないなあと思っていたのに！

「真剣なのに！」

「しゅっしゅっ。うん、わかってるよ！しゅっ。ごめんね、みどり」

「……べつにいいけど」

ずんはそれを聞いてにつこりして、そして目をつぶった。ぼくも薄暗さに導かれるようにして、目を閉じる。ずんとぼくの体温で、ふとんの中があったかくなってきた。

どちらともなく口にする、

「おやすみ」

あしたにもあさつてにも興味はない。

こんな今が、ずっと続けばいい。あしたもあさつても、今になればいい。

足りないものは、ちゃんと体温で埋めたいと思う。便利だからって作られたもので埋めてしまっっては、なんだかばかみたいだ。作られたもので失って、また作られたもので埋めると、ぼくの方が変みたいじゃないか。

それを、ずんはわかっているのだろうか。

ぼくはずんに、絶対に指図はしないことをわかっているのだろうか。

全部、自分で決めなきゃいけないんだよ、ずん。

ぼくはそれで、この生き方を選んだんだよ、ずん。

ねえ、ずん。わかってくれている？うまく気持ちを言えないぼくを、わかってくれている？

右腕のないぼくでは、ずんの義足には敵わないの？ぼくの方が絶対におっきくて、あったかいのに。

7. ずん？

恨みからはなにも生まれないのよ、

お母さんのことば。

だいじょうぶだよ恨まないよ

なんのせいにもしないよ

かなしくなんかないから

ごおおん と灰色の空を駆け抜けていく灰色のものが輝く
ぼくの代わりに 太陽が攻撃をしてくれているんだ

恨んだりしないよ

その代わりに うんと笑ってやるんだ

ぼくが笑えば笑うほど、あいつらは悔しがらるだろうから

ぼくが耐えれば耐えるほど

変な笑い声がぼくの武器だ、かかってこい！

補償 なんていらない

そんなのは思うツボ

だからぼくらは助け合う

ねえ そうだよね、みどり

覚えるのが苦手なら、思い出すのも苦手だから、みどりに会ったときはとても嬉しかった。ぼくが何も言わなくても、みどりは黙って手をひいていつてくれたから。

あの日は珍しく、風がなかった。

暑い暑い日々を越えて、これでもかというくらいに枝々に緑色の葉をつけた木々たちは、ここ数日でいっせいにそれを地面に振り落とされていた。茶色くなったり黄色くなったりした葉っぱたちは、遠くから見ると珍しいお花畑みたいに見えた。ふわふわの上を歩いていると、このままどこまでもどこまでも行ってしまういたい気分になる。海を渡って、日本にも帰れちゃうんじゃないかってさえ思う。一步が次の一步をいざない、ぼくはふわりふわりと歩いていく。しゅっ。葉っぱと土とおひさまのにおいだらけだ。

「純ー！そろそろお昼ごはんだよ！」

お母さんの声でした。むっちりした右手をぐわんぐわんと振って、ぼくを呼ぶ。その横で、妹のキャンが同じように手を振っていた。しゅっしゅっ。キャンはお母さんのすることを、なんでも真似したがる。手の角度までそっくりだ。

「はーい！今行くよ！」

くるっと振り返って、歩いてきた葉っぱの“お花畑”を走る。わお！跳ねる、跳ねる。ご飯が終わったら、キャンもつれてきてあげよう。

ぼくがおぼえているのは、そこまでだ。たったの、これだけ。一番大事なところが思い出せなくて、ぼくはみどりに申し訳ないと思った。それまでは一度も“大事なこと”について訊かれることはなかったから、申し訳ないだなんて思ったことはなかったけれど、みどりは別だ。

お腹がすいていたかも覚えていないけれど、あたりはほんとうにいい匂いだった。葉っぱと土とおひさまの匂い。

その後覚えているのは、壁紙が剥がれかけた天井。くすんだ白が斜めにめくれて、茶色い漆喰のようなものが見えていた。部屋はとても湿っぽくて、でもぼくはとてもものが渴いていた。

「純くん」

知らないおばさん。

「気づいたのね、よかった。純くんのお母さーん！」

ばたばた、とおばさんがいなくなったと思ったらすぐに、お母さんがきた。寝転がっているぼくを覗き込む。

「純！」

お母さんは泣いていた。ごめんなさいと言った。ぷっくりした10本の指で顔を覆って泣きながら、何度もぼくの名前を呼んだ。

お母さんの横に、キャンはいなかった。代わりに変な形の焦茶色の木の棒がある。

それを見て、ぼくはやっと気づいた。気づいたら、左足の腿がじんじんと熱くなってくる気がした。ああ、そっか。ぼくは地雷を踏んでしまったんだね。

「おかあさん、泣かないでよ」

ぼくは、だいじょうぶではないけど、泣くほど悲しくはないよ。そこまで言おうと思ったのに、先に涙が溢れてしまった。びっくりした。だけど、のどが熱くなって、声まで出して泣いてしまった。それを見て、お母さんはもっと泣いてしまった。

さっきの知らないおばさんが、忙しそうにお母さんの後ろを走っていく。その先に、お母さんみたいにわんわん泣いている髪の毛の長いおばさんがいた。おばさんの腕の中には、キャンくらいの女の子がいた。だけどキャンと違って、片足がそっくりなかった。巻きつけた布からぽたぽたと赤黒いものが落ちているのを見て、ぼくはもつと涙が出てしまった。その子がかawaiiそうなのでも、そのお母さんがかawaiiそうなのでも、自分のおかあさんにもらい泣きしたのでもなく、さっきまでぼくもあんな風にぽたぽた血を流していたのかと

思うと、背中 of 筋肉がひきつってしまいそうなくらい怖かった。怖くて、泣いた。

その後は、寝たんだと思う。泣いて、疲れて、寝てしまったんだろう。次に目が覚めたときは、お母さんはいなくて、あたりは真っ暗で、暗闇にぼうつと浮かんでいる杖だけが見えた。だからぼくはそれをつかってベッドから降りてみたんだ。

よいしょ。

痛くない、といったらウソになるけれど、耐えられないほど痛いでもなかった。知らない間に手術が終わっていて、ぼくはラッキ―だったと思う。

右足を下ろして、右手で杖をとる。ぐっと杖を床に押し付けるように力を込めると、太ももの半分から下のない左足が、うまくベッドから降りた。立てる。しゅっ。杖があれば立てるのだ。それを確認したら、自然と口元が三日月を描いてしまった。本能的に抱いていた不安が、すうーっと消えていった。

ぼくは、闇夜へくりだした。

また、地雷を踏むかもしれない。そしたら今度こそぼくは死んじやうんだ。そう考えると、また泣いてしまいそうだった。死んだら、ぼくはどこにつれていかれるんだろう！？

だけど、ぼくの右足と杖は、ゆっくりと前へ進むことを選んだ。冷や汗の出そうな不安よりも、こんな状況でも前へ進めることが嬉しくなってしまった。何個もあるベッドの間を静かにすり抜けるのは大変だった。ケンケンで移動しているとはわけが違う。

あのとき、ぼくはみどりに呼ばれていたんだと思う。

じゃなきゃ、なんであんなに一生懸命に前だけ見ていたのか、説明がつかないよ。

ぼくがつかいことから目をそらさなかったのは、あの夜が初めてだったんだ。

8. ずん？

やたらと声をかけられる。これでもう4人目だ。また地雷を踏んでしまう心配より、もっと現実的なことを考えるべきだったのかなあと思う。まあ、いまさらだけど。

「さわるな、」

「助けてやってるんだよ。学校でありがとうの精神くらい教えてもらっただろう？」

「学校には行ってないよ」

「それじゃあ尚更、助けが必要じゃないの、ぼく？」

「やだってば、」

ぼくが走り去れないのいいことにたかってくるやつらは、みんな同じ目的だ。誰もが異口同音に「安くしておくよ」と言う。

左腕をちゃめच्याに振り回す。

「うわ！」

相手がひるんだすきに、右手で握った杖を大きく前に出して、体を持ち上げるようにして一歩進む。こうすると、普通に両足でやる“大股”の1.5倍くらいの幅で進めることに気づいたのだ。杖にもいいところはある。

後ろを振り返ってはだめだ。今自分がどこにいるのかなんて全然わからないけれど、とりあえず遠くへ。右足だけで立つ。バランスが崩れないうちに、おつきく右手の杖を前に。そのまま力を右腕にぐっと込めて、右足を前に。右足が着いたらまたすぐに杖を出して。できるだけ大きく遠くへ出して、また一歩。また一歩。はっ、はっ、はっ、はっ。息が荒くなる。杖の先がぐにやりと埋もれる。さっきまでのカラカラに乾燥した土地はいつのまにか、湿ったものに変わっていた。

何分くらいそうしていただろう。

ぼくは気づけば、逃げることもよりも、できるだけ大股でできるだ

け速く前進することに集中していた。振り返ると、そこはただ真っ暗なだけで、ぼくが止まれば、なんの音もしない。小さく虫の音がするくらいだ。風もない。

「ふう……」

できることなら座りたかったが、一度座って起き上がれるのか、自信がない。

右足がじんじんといった。いきなりひとりになって、いきなりふたり分の仕事を押し付けられたのだから（しかも普段どおりならば時間外のこんな夜中に）、疲れて当然だろう。長い時間飲み物も食べ物も補っていない胃袋も、きゅるると情けない悲鳴をあげた。

義足、かあ……。

暗闇の中に見つけた太めの幹に寄りかかり、さきほどの数々の勧誘を振り返ってみる。

そんなに、義足は需要があるのだろうか。……あるだろう。そりゃ、ぼくだってないよりはあるほうがいい。片足ない方がいいだなんて人がいるわけないよ。

ふと、さっき病院で見た少女を思い出した。いやな記憶というものは濃くなっていくものなのか。さっきは赤黒く変色した包帯ばかりが目についていたけれど、思い返すと、もう片側の足の黒く焦げた部分だとか、胸から下がなくなっている水色のワンピースだとかがリアルに思い出された。あの子はもう手術を終えたのかな。この地域には地雷による怪我人のための病院はあそこしかない。ぼくの近所の友達のお兄ちゃんは、込み合っているために丸一日手術を先延ばしされた、と前に聞いたことがある。麻酔もない中でちぎれた足を24時間、応急処置のみ放置しておくのは、過酷以外のなにものでもないだろう。「それでも純はラッキーだったのよ」と言ったお母さんの言葉が、リアルに感じられた。そりゃあそうだ、ぼくは地雷に足を飛ばされた痛さで半日間気を失っていたおかげで、手術

待ちと手術という、もう一つの痛みに耐えずに済んだんだから。

寝る前に飲まれた痛み止めは、いつきれるんだろう。きれたらどれほど痛いんだろう。

現実として存在は知っていた“地雷”。実際に出会うと、こんなにもどうしていいのかわからない。

不思議と、悲観的にはならなかった。きっと、実感がなさすぎたんだと思う。ぼくはまだ、痛みにもだえることを知らなかった。片足のない状態は、まだまだ好奇心がカバーできていた。お母さんがわんわん泣いてくれて、ぼくも一通り泣いて、そこで悲しむことは終わりにしなきゃいけない気がしたんだ。だからぼくは、暗くてもひとりでも平気だった。

だけど、なんでだろう。

ほんとうに、純粹に、なんとなく、てきとうな気持ちで、「死にたいな」と言ってしまった。なんだかそれが一番妥当じゃないのかな。何に対してかはわからないけれど、なんか一番自然に思えた。

ああ、だからか。だからぼくは、義足を欲しいとは思えなかったんだ。

杖を持っている右腕までも痺れてきた。

ああ。しかたがない。

幹にそってじよじよに背中をおろす。

わ！

ゆっくりと座るつもりが、ちょっと膝を曲げたとたんにガクンと右足が脱力して、ぼくは思いきり尻餅をついてしまった。その反動で、つかえ棒のようになっていた杖が右手から離れ、闇の中に飛んでいく。

杖！

あれがないと、ぼくはどうしようもないのに！
思っても、どうすることもできなかった。酷使した体は、湿った

土の上で腐ったみたいにとろとろになって動かなくなってしまった。左足の包帯に、土のわずかな水分が少しずつ染みしてくる感じがわかる。どうやら神経はあるみたい。と、そうして左足を意識すると突然に、縫合面が内側から殴るみたいに痛み出した。

「うー！」

いたい……！！

尻餅をついた衝撃のせいだろうか。いきなりの攻撃だった。背中が熱くなってくる。力を入れたらいいのか抜いたらいいのかわからない。ちよつと止まったと思ったたらまたやってくる。

どす！どす！

どうやったら痛みを和らげることができるんだ！歯を食いしばるしかなかった。

足が痛い。もはや足と呼べるのかわからないけれど、その約20センチがとてつもなく痛い。痛み止めはもちろんのこと、ほんのさつきから杖もない。食べ物もない、飲み物もない。どうしよう、どうしよう。どうすることもできない。もだえるにも、体のひねり方すらよくわからなくなっていた。死のうにも、こんな暗くてただっ広いところじゃ自殺の方法すらわからない。

気力もない。なんだかよくわからない。死なくてよかった、と思う。どうして殺してくれなかったんだ、と思う。なんでぼくが、なんで地雷を踏んだのか、なんで地雷がそこにあるのか、なんで地雷をつくったのか、なんでこんなに痛いのか、なんでまだ痛いのか、はっ、はっ、はっ、はっ。

大きな呼吸で動く肋骨の振動が足に伝わり、更に痛みを増す。最低の悪循環！

涙も出ない。声も出ない。

このままこうしていればほんとうに死ぬと思った。

だからぼくはそれを待った。意識がなくなるまで、耐えた。

マイナスがプラスを呼んでくれるほど、世の中単純だなんて

思っていないよ。

子どもだけど、ぼくはそんなに子どもじゃないんだ。しゅっ。

だけどぼくがあのとき死ぬほど苦しまなかったら、みどりとは出逢えなかったと思う。

やっぱり、かみさまは、いるの？

9. みどり？

かあさん

とうさん

じいちゃん

死んだばあちゃん

栗田のおじさん

シロ

野崎先生

川田先輩

りゅうた

かずお

みあ

ぼく

たいせつなひと。

朝日

ご飯

挨拶

笑うこと

勉強

叱られること

笑うこと

走る

読む

からかう

ときどきする

散歩

風呂

ベッド

しあわせ

でも、それでいいのか？って 思っちゃったんだ

NHKって よくできてると思うよ、ほんとに

なんかしなきゃいけないよな、って したいな、って こんなば
くに 思わせるんだから

でも今になって思うよ

小さなテレビの向こうからぼくを呼んだのは 真剣なまなざしの
レポーターじゃなくて

ずん だったんだね。

—

「……4度、」

小学校のミニバスの放課後練習でくたくたになって帰ってきて、
かあさんとうさんとじいちゃんと夕飯を食べたぼくは、お目当て
のニュースと天気予報が終わり特集番組が始まってもおだらだら
とつけっぱなしになっていたNHKに釘付けになった。

風呂に行こうとして、洗濯ものの山の中にあるバスマットをとり
にきて、まず目に飛び込んできたのは、色黒で細くて目がくりくり
した女の子（と思われる）の映像。涙一滴流してなくとも、それが

おびえた顔だとはっきりわかるような表情のその子の下半身、膝から下には、なにもなかった。いや、なかったというか……あっただろう“足”というものが消えて、代わりに焦がしてしまったカリフラワーみたいなものが両足からぶらさがっていた。変形というか……長く見ていられない。ところどころ見えた白いものは、骨だろうか。

対人地雷の恐怖と、その撤去活動についての特集番組だった。スタジオの映像に戻ると、女性アナウンサーの隣には、白髪交じりの“専門家”らしい人がいる。

『こちらに用意しましたが、対人地雷の数々です。波多野さん、本当にたくさん種類があるんですね』

『そうですね。では、一つずつ簡単に説明します』

波多野さん、と呼ばれた専門家らしい人が、カメラに向かって手のひらサイズの物体が陳列してある台の横に立った。

『まずこちらの三つは、もっとも代表的な爆発型の対人地雷ですね。左側の二つが、旧ソ連型のもので、微妙に構造は違うのですが……どちらも5〜6kgの重量に反応して爆発する、という形式は同じです。そして残りの……こちらは、中国製のものでして、これは重量に反応して爆発するものではなく、傾斜角度によって起爆するものです』

『傾斜角度？』

『はい、地中に埋め込む形をとる地雷なんですがね、これがちょっとでも傾いて……厳密には、たった4度傾斜するだけで爆発します』

『4度！』

「……4度、」

アナウンサーとハモってしまった。

『これらの“爆発型”とよばれるものは非常に生産コストが低く済むもので、大戦中紛争中に大量生産されておりとあらゆる地域にばらまかれている上に、この中国製のもののようなハイテクなもの

が増えたことでより一層撤去作業を困難にしています。現在の地雷原にもっとも多くみられるものが、これらの“爆発型地雷”です。そしてこの隣が、“破砕型”で、これは文字通り、爆発とともに地雷に備わった金属がばらばらに飛び散って人体を傷つけるものです』

さきほどの少女の映像がまた映った。まさか二度も見るとは思っていないで、思わず息を呑んだ。あんな細長いリレーのバトンみたいなのやつで、人はこんな人に人をめっちゃめっちゃにできるんだ。

『この“破砕型”含めあとは全部旧ソ連製のものです。これは、“跳躍型”でして、』

今度のはトイレットペーパーみたいな形だった。これは一発めの爆発の後、2メートルくらい“跳躍”してまた爆発するらしい。

『つまり、足元も上半身も傷つける、という』

『そうです。この型では死亡率が高いです』

他にも、爆発と同時にパチンコ玉くらいの鉄球が何百個も飛び出してきて大量殺戮を可能とするものや、蝶々の形をしてカラフルに彩られ、いかにも子どもが誤って触れてしまいそうなものなど、そこにあるのは卑怯で残酷なものばかりだった。

「どうした、緑」

突っ立ってテレビを見ているぼくに、じいちゃんが声をかけた。

じいちゃんはぼくの目線の先を見ると、「地雷なあ……」と呟いた。テレビは一通りの地雷の紹介を終えた後、撤去作業に献身している団体のドキュメンタリーを流し始める。

「……おかしいよね、じいちゃん」

「うん。いかな」

一瞬、じいちゃんはひよっとして本物を見たことがあるんじゃないかって思ったけれど、口には出せなかった。ぼくがさっきの少女を二度見たくなかったように、じいちゃんだって思い出したくないこともあるはずだから。

「早くお風呂に入りなさいね。おやすみ」

「うん、おやすみ」

ぼくはテレビ画面を見たまま言った。かあさんは食器洗いやら台所の掃除に忙しそうだ。とうさんは明日の仕事の準備とかで今夜も部屋にこもっている。早寝のじいちゃんはどう、ばあちゃんの黒枠の写真の下で布団に入っている。ぼくだけがこれを見ている。12歳のぼくは、今日初めて、“世界”を見ていた。

ドキュメンタリー映像では、金属探知機をもって地雷原に踏み込む勇敢な人々の姿を追っていた。現地の被害者と交流をしながら、毎日ひたすらだけを行う。だけど、何十人単位で一日がかりやったって、撤去の成果は両手で足りるほどだ。地雷撤去用の大型機械も開発されてはいるらしいのだが、コストがかかってなかなか実際には普及していないのだという。当然、人の手による撤去作業には危険が伴う。撤去で被害にあった人も、日本にもたくさんいるらしい。

現地の被害者がコメントをする。「早く地雷がなくなればいいと思うよ」。みんな同じことを言う。だけど、あまり切実に聞こえないのは、そのことばの端々に“あきらめ”が感じられるからだろうか。

『ここが地雷原だってことは知ってるの?』

「ええ、知ってるわ」

『じゃあどうしてここに住んでいるの? 怖くはないの?』

「……だって、ここに住むしかないんだもの」

少女は笑ってそう言い、ドクロマークで仕切られた地雷原を走りぬけていった。その先にある木造の建物が彼女の家の家なのだろう。

ねえ。食器洗いって、今しなきゃいけないの? かあさん。

明日の仕事、って、こういう被害者を出さないことにつながるの? とうさん。

ねえ。寝てていいの、じいちゃん! 見たんだよね? じいちゃんは知ってるんじゃないのか、ちょっとは、なら、なんでそんなに毎日盆栽とかいじってのんびりしてられるんだよ!

ばあちゃん。会ったことはないけど、ばあちゃんはどう思う?

ぼくは、どうしたらいいと思う？

ぼくは、ミニバスのスタメンに選ばれるために体力をつかっていいんだと思う？

みあにプレゼントをあげるためにお小遣いをつかっていいんだと思う？

……なんだか、落ち着かないよ。

だって、なんか、おかしいじゃないか。うまくいえないけど、なんか変だよ。

ぼくは、いやだよ。

心臓のどきどきが、今日の放課後練習後の何倍もあった。

ぼくはここで焦げたカリフラワーみたいな足、『4度傾いたら爆発する』、『カラフルな蝶々の形』、それが、昔の話ではないこと。今も一時間に三人、こうして足をなくして手をなくして悲しんでいる。

このままじゃ、今夜は寝れないよ！

ぼくは番組が終わるとすぐに風呂に入った。時計はちょうど23時を指している。そろそろ、とうさんが寝る時間だ。とうさんの仕事は朝が早い。

ぼくはどうさんが寝室に行くのを確認してから、書斎に入った。パソコンの電源を入れて（ちよっと前にとうさんに習ったのだ）、『地雷』と検索する。びっくりするほどのヒット数だったから、そこに『撤去』『ボランティア』と入れて、再検索。急げ、急げ。21時からの番組だったから、もうあれから2時間半がたとうとしている。じゃあ、8人！もうあれから8人も地雷を踏んでいるんだ……！

こんな衝動は初めてだった。止まらない。どうにかしたい。なにもされていないのに、泣いてしまいたい。

お。ここにしよう。

ぼくはやつとみつけたサイトで、資料請求のボタンを押した。

ぼくはみんなが思っているような小学生よりはオトナだったと思っていた。だけどそれは、大きな勘違いだ。対象がゲームや漫画じゃなかっただけで、ぼくの突っ走り方はれっきとしたコードモだったと思う。その向こう見ずさも。まあ、だからこそ、ずんに会えたのだろうけれど。

ぼくはあの、映像を見た瞬間の、事実を知った瞬間の胸の痛さを、絶対に忘れたりしない。

ぼくはあのとき確信したんだ。かみさまなんて、絶対に、いないよ。

10. みどり？

かあさんは分からず屋だと思う。とうさんも分からず屋だと思う。じいちゃんも、分かっているのに知らんぷりをする、弱虫だと思う。りゅうたんと、かずおは知らなさ過ぎると思う。みあは、ぼくなんかの心配をしてることがおかしいと思う。

そこに立ってみてしかわからないことがあるんだ。ぼくはそう強く確信して、ここまでできた。全部を振り切った。みんながおかしい、どう考えたって、放って遠い場所で知らんぷりして毎日をすごせしてしまうみんなの方がおかしいじゃないか。

土。木。空。風。そこにあるのは、ぼくの近所の公園にあるものとなんら変わりはない。なのに、何かが違う。

こども。おとな。あしのないひと。あかちゃん。いぬ。あしのない牛。

ときおりおとずれる静寂がぶきみだった。ぶきみだと思っても、動けなかった。どこから漂ってくる、焦げたような匂い。足がすくんだ。全身が震えた。

ばかなこと言わないで。

かあさんがぼくをばか呼ばわりした理由が、今になってわかる。気持ちだけで役に立てる事柄ではないのかもしれない、と金属探知機を手にしてから思った。

ぼくも、だいぶん分からず屋だったのかもしれない。

元気で帰ってきなさいよ。と、貯金をおろしてぼくに渡してくれ。たじいちゃんとの指きりを、ぼくはだめにしてしまった。家に帰ったら、針を千本飲まなくちゃ。それと、これとはどちらが痛いんだろう。

とても、変な感じ。

ぼくは地雷ひとつを取り除く前に、自分の右腕を取られてしまった。一瞬だった。

もう今は無い肘から指先までが、もうそこには空気しかないのに、ひどく痛む気がする。目に見えないものを治療するには、どうしたらいいんだろう。

ぼくはもう、自分のことで頭がいっぱいだった。

けが人を見て涙を流せていたのは最初の二日間だけで、あとは自分のために丸四日間泣いていた。そんなぼくを見て、仲間の日本人の大人たちは、あーあ、かわいそう、なにをしているんだか、と顔に書いたかのような表情をした。12歳の子どもはぼくだけで、年齢制限のない団体にしても、さすがに足手まといでも思っているのだろうか。

ぼくはどうして、ここにいるんだろう。

救いの手は、もう、片方しか出せないというのに。

この六日間で、何人の人がけがをしたんだろう、と思うと泣けていたこの間までがウソみたいだ。それはぼくがその“けがをした人”に含まれてしまったからだろうか。

また、涙が流れる。なんだかとてもない間違いをしてしまった。ぼくはもう絶対に、ミニバスのスタメンにはなれないのだ。

目を閉じると、おいしいものが見えるんだ

息を吸うと、花ばなの甘い匂いがあるんだ

きれいなミツバチの羽音が、なんだかとてもわくわくする

かくれんぼのカウントに 毎日のはじまりを感じるよ

青い空のおいもするよ

かあさんの手のひらのおいもするよ

ちよろろと、川のはしっこの音もするよ

さあさあというせせらぎが、ひんやりした風をつれてくるよ

これが きれいってやつなんだ

ねこも笑うよ おひさまが味方だ おほしさまは友達だ
目を閉じると、あったかいものが見えるんだ
ぼくも みんなも 思わずえへへと笑ってしまふような
息を吸うと、とうさんがお酒を飲んだときみたいに ぷはーって
言いたくなる

生きてるーって、叫びたくなる

ふわふわ ぽかぽか わくわく にこにこ

これが しあわせ？

これが 生きているということ？

緑色は自然と平和の象徴なんだよ、というじいちゃんのことばは
ぼくにはちよっと難しかったけれど

ほんとうだ

ふわふわで ぽかぽかで わくわくして にこにこしてしまふ世

界は

緑色、

みどりのじゅうたんが、全部を支えている

全部をはじめて 全部をつつめる

ぼくはそれだけでじゅうぶんだ

目を閉じた世界は 金平糖みたいなにおいがするんだ

肺の中に吸い込んだ世界は 春風みたいな音がするんだ

みんなの眉がさがってしまふね みんなの笑いごえが止まらないね
しゅっ しゅっ しゅっ しゅっ しあわせ！

……ねえ、これは 未来のおはなし？
それとも、ずっと 過去のおはなし？

11. ありがとう

ずんが踏んだのは、一番有名な“爆発型”。爆弾だよ、火薬が、ほんのちよつとだけ入っている。だから死なないんだ。だからとても安く作れる。

地雷を作った最初の目的は、もちろん戦争中、敵に対して使うためだよ。機関銃、戦車、航空機、毒ガス、いろんな兵器のある中で地雷がここまで使われたのは、これがすごいヒキョウだから。うまく発想の転換をしたんだ。機関銃は、敵を追い払い威嚇するためのも道具で、確実に撤退させられるとは限らないし、一発がうまく敵に当たっても、それはその一人を殺すだけ。地雷は、たった一個で、三人の兵士を撤退させることができるんだ。しかも一人も殺さずに殺さずに戦意をそぐことができたなら、それは戦争にとって一番いいことだから、なんだって。確かに、殺すよりは殺さないほうがいいよね。

しくみは簡単だよ、つまりね、一人の兵士が地雷を踏むでしょ、そしたらその兵士の片足とか、両足とか、ほらずんみたいになくなっちゃって、すごく痛いんだよ。ぼくもずんも、吹っ飛ぶときに気を失っちゃったからなんとも想像できないんだけど、やっぱりめちゃめちゃ痛いと思う。うん、ずんも痛み止めが切れたときになに苦しんでいたんだから、きつとその倍くらいだ。そう、そうやって一人が痛さでわんわんうめくんだ、わー！痛い、たすけて！って。そうしたら、周りにいる兵士たちはどう思うだろう？百人単位で攻めて行く中で、仲間の一人がうめいている。血をだらだら流して、気持ち悪い形になって焦っている足。ほうっておけるかな、って話だ、絶対に、その仲間をとりあえずは味方の陣地に戻さなきゃ、って思うらしいんだよ。そして、助ける。だけど足がなくなっただけはいえ、わめいている大人をひとりでは運べない。腕を肩にかけてもちあげる。ふたり必要だ。これでその地雷を踏んだ兵士の両隣の

兵士も同時にその場からいなくなる。敵側がつかったのは、生産コスト数百円の地雷一個だけ。そして三人を同時に撤退させる。効率もいい、人殺しもしていない！地雷はあつというまに戦争のヒツジユヒンになっちゃったんだ。みんな、みさかいなくあたりかまわずに撒き散らした。早く戦争を終わらせるためには安すぎるくらいの出費なんだよ、戦争を長引かせるにはずっとお金がかかるからね。そう、お金なんだ。知らなかったの？お金が全部だよ、戦争をするのを、続けるのも、やめるのも、お金のことを考えて決めているんだ。そして兵器の会社はたいてい、その国とテイケイしている。

そう、もう一個はお金の話なんだけどね。地雷を使っていたあるとき、とんでもないことに気づいちゃったやつらがいるんだ。そいつらは、まず、一個の安い地雷でどれだけの兵士を傷つけることができるか、を考えた。いっぱい傷つければ、いっぱい撤退してくれるよね？そしてもう一つ、治療のことだ。たいていの兵士は足を失ったら治療をする。ずんみたいにね。兵士の場合、その治療費は国から出るんだよ、ずんは少しはお母さんが出してくれたと思うんだけど、兵士はタダ。まあこれも国の責任だからなのかな？そうそれでさ、さっき、お金が一番って言ったのがここ。敵をいっぱい怪我させれば、敵の国のザイセイをアップクできるんだ。うんと、つまりね、敵は兵士の治療にお金を使わなきゃいけなくなって、戦争のための兵器とかのために使えるお金が減っちゃうんだよ。殺したら殺したで国は遺族に死亡ホケンみたいなのを払わなきゃいけないんだけど、それよりも治療費の方がダメージになる。なぜかというと、治療費は、戦争中に払わなきゃいけないから。早い治療が必要な怪我だっていうのは、ずんもわかるだろう？放っておいたら死んでしまう。あまりにモトがとれないんだ、それじゃあ。片足でも戦車になら乗れるから。そこが狙いなんだよ、死んだ場合の遺族へのお金は戦争が一段落して国が落ち着いてから払うことだってできるけど、怪我の場合はそうはいかないだろう？

そのしくみをもっと詳しくみて、やつらはもっと最悪なことに気

づいた。それが、今ずんがやられたみたい、一般人に対する対人地雷だよ。

ずんも、確かに少しはお母さんが払った。じゃあ残りは何？っていうと、やっぱり国なんだ。イリヨウホケンってのを国は払わなきゃいけない。つまりね、全額じゃないにしろ、国は一般人が怪我をした場合の治療費の大部分は払う必要があるんだ。そこに気づいたやつらは、しめたとばかりに一般人の通りそうな草原に地雷を埋め込んだ。なにも知らない人が通る。踏む。爆発する。足がなくなる。国がイリヨウ費を負担する。なにも知らない子どもが触る。爆発する。手がなくなる。国がイリヨウ費を負担する。ひどいだろう、ほんとうに。大人はお金しか見てない。ぼくのかあさんも、ぼくがここにくると言ったときには開口一番、どっからそんなお金をもってくるの、だ。みんなお金の話ばかりなんだよ。

そう、それが戦争のときの話。じゃあ、今は？っていうと、これがまた話は別なんだ。

今はぼくみたいに、地雷をなくそう、って思う人が活動できるようになっている。ぼくもこの間まで本当になんにも知らなかったんだけど、仲間の大人の人がいろいろ教えてくれたんだよ、さっきの話もそうなんだけど。いろいろ難しいジョウヤクができて、みんなで頑張っているんだ。すごいよね、ぼくもすごいと思う。だって失敗したら……ぼくみたいに手足をなくしてしまうかもしれないんだよ。ぼくはそこまで考えてなくてここに来ちゃったからまた違うんだけど、へへ。だけど、そうなるかもしれないけどもみんなを助けたい！って人がいっぱいいるんだ！本当に。ずんの踏んだ地雷をとることには間に合わなかったけれど、たぶん日本にある団体だけでも何百人ものひとの足を救っているよ。そこには希望が見えると思わない？手術のギジュツもとてもすすんでいるみたい。この国ももっと豊かになったら、みんなたっぷりと麻酔をもらってから手術してもらえるはずだよ。うん、ほんと、ずんは眠ってラッキーだったよ！ぼくはあんなに痛い思いをしたのは初めてだった、しかも自分

の真っ赤でぐじゅぐじゅした腕をずうっと見てなきやいけないんだ！もう一回気を失いたって何度も思ったよ。

そう、それで義足とか義手のギジュツもとてもすすんできているんだよ。うん、そうそれ、変なやつらが裏のルートで手に入れて、安い値段でテイキョウできちゃうくらいにね、安いものでもそれなりのものが増えてきているみたいだ。まあ義足そのものが安くて、それをつける手術がかなり高いんだけど。そうだよ、かなり。……ぼく？ぼくは、どうしようかな。めっちゃめっちゃ悲しいよ、痛かったし、悔しいし。ほんとにばかだと思うし、これからさきこの手で、しかもぼくは右利きだったし、どうしようかなって本当に悩んじゃうけどさ、だからって義手をつけられいっててもんでもないと思うし。正直そのへんはちゃんと聞かなかったんだ、悩んでたらどうしたらいいかわかんなくなっただけで病院を飛び出して、そしたらずんを見つけた、って感じだから。本当にぼくは考えが足りないんだなあって思う。……え？うん。ぼくも、よかった。見つけて、しかも日本語をわかってくれたときには、こりゃあウンメイだ！って思ったよ。ありがとう、ずん。

左腕一本でずんを支えて入り込んだ近くのちっちゃい倉庫みたいなところで、ぼくはずんに地雷について話した。ずんはときどき不思議そうに首をかしげたり、うなずきかけて止まったりしたけど、たいていはウンウンといいながら、相槌をうってくれた。

ぼくはずんに話したいのが半分、聞いてほしいのが半分だった。きちんと知識をもってここまでできたこと、中途半端な気持ちじゃなかったってこと、だから怪我をしたのはかあさんが言っていたみたいに、ぼくはばかだからじゃないってことを、だれかに訴えたかったんだと思う。

「病院で、知らないおばさんがね、」

一通り話し終えてあたりが薄っすらと明るくなってきたとき、ずんが言った。

「明日からさっそくりハビリをしなきゃね、って言ったんだ」

「リハビリ。うん」

「って、なに？」

ずんの黒い目が不安そうにうつむく。単に年下だから幼く見えるのではなさそうだ。

「ええと。体操、だよ、筋肉の」

「キンニク？……足の体操ってこと？」

「うん。たぶん、太腿から下がなくて左足がさばらないようにするためだよ」

ぼくはできるだけ優しく笑った。こんな風に人に接するのは初めてだ。

「なあんだ！」

しゅっしゅっ。

ずんが初めて笑った！ぼくもそれを聞いて笑う。

「なに、それ！変な笑い方！」

「やっぱり、みんなに言われるんだ、しゅっしゅっしゅっ。ああ、なんだ、よかった」

「うん、心配しなくてもだいじょうぶだよ。別に義足をつける前のリハビリなんて、自分でも勝手にできるくらいの簡単なやつだろ
うし」

「みどりは自分でできるの？」

ずんがぼくの顔を覗き込む。

ぼくは、そういえば、どうするんだろう。この先ここにいてもどうしようもないけれど、だけど誰もぼくに帰れとは言わなかった。リハビリをしようとも言われなかった。

黙りこんでいると、ずんがにっこり笑って、

「じゃあ、今日から一緒にリハビリしようよ」

「……え！？」

なにを言い出すんだ、と思って目を見開くと、ずんがそんなぼくを見て同じように目を見開き、そしてしゅっしゅっときさききよりも

うんと元気に笑い出した。

「しゅっしゅっしゅっしゅっしゅっ！みどり、おもしろい！」

どうやらぼくの驚いた顔がおもしろかったらしい。ぼくもずんの元氣なしゅっしゅっを聞いて、また笑いを誘発された。ふたりで笑う。朝日が昇る。小屋が明るくなる。笑っていると明るくなる。ふたりでいると、ずんとふたりでいるとなんだかとてもあたたかい。

現実的には、どうだろう。笑いながら、ふと自分の腰につけたポシエットを探る。分厚い。だいじょうぶ、全然だいじょうぶだ！

「いいね、それ！」

ふたりでリハビリ。それって、すてきだよ。

わくわくしてきた。安心した。なんだかうんと満足だ。

「よかった！じゃあ町の近くに行こうよ、ぼくがふたりのためのお家をみせてあげる」

「え？二人のためのうち？」

「うん、こないだ死んじゃったお父さんと一緒にみんなですっと住んでた小さいお家があるんだよ。ちゃんと窓ガラスもあるんだ！お母さんが、お父さんのいないあの家で暮らすのはつらい、ってゆってこっちに引っ越したんだけど」

そうなのか。でも、ずんはじゃあ安全な町からこっちの地雷原の近くの家に来て、足をなくしちゃったってことだね？それって、どうなの、ずんのお母さんは、お父さんを思い出してしまうことと、ずんが足を失うことと、どっちが辛いんだ？

そんなの、聞けない。

「すごいなあ。じゃあ、今日からふたりで住めばいいってことか、ほんとにいいの？ずん」

「オッケーだよ」

ぼくらはもう、傷の痛みを遠くに追いやれていた。失ったものから得たものを、はっきりと目の前にして、やっと満たされた気持ちになった気がした。深いことは考えたくない、ただ、いまがぼくを呼んでいる。自分の世界しか見えていないことに苦しいくらいの衝

撃をおぼえたはずなのに、今のぼくには到底、他を見る余裕なんかなかった。どうでもいいとすら思った。逃げよう、ずんと一緒に、いや逃げるんじゃない、立ち向かうんだ、ずんと一緒に。じぶんに立ち向かうために、片腕では心細いから。

支えあつてなお不安定なふたりで、ぼくらはゆつくりと町に向かった。おひさまはぼくらの目の前に、ちゃんと道を示してくれていた。

12. ばいばい

今日もまたとてもいい天気だ。雲もない。すうっと青い空は、近くも遠くも思えた。内側から光っているみたいに、まぶしい空。もうすぐ、春になる。

「できた、」

「よし。そっち、貸して」

「みどり、へいき？」

「うん。全然軽いよ、」

ずんが何を心配しているのか、ほんととはわかってる。

ぼくのいる団体は、親切だった。そりゃあ地雷撤去の団体なんだから人に対して親切に決まっているんだけど、思ったよりもうんと親切で、ちょっとおせっかいだった。その分地元でも有名なのだそうだ、ずんが言っていた。

寄付金がかなり集まったらしい。スーパーでのおばさんたちのささやくような会話によると（きつとぼくらがいたから遠慮がちに話していたんだろう）、なんとこの地区にいる12歳以下の子どもに、無償で義足をつける手術を施してあげる、という計画をもちあげているそうなのだ。ずんはまだ10歳だ。十分その手術を受ける資格がある。

タダだったら、誰だって欲しいと思うだろう。ぼくだって、今すぐにつくのなら、とりあえずつけておきたいな、って思うかもしれない。たとえ作り物でも。それは誘惑とかじゃなくて、きつと必要なものだ。

だけどなあ、って思っただけで悲しくなってしまう自分に気づいたのは、ずんが初めてぼくにその計画の話をしてくれたときだった。町では結構噂になっているみたいで、足のないずんを見た見知らぬ人が、喜びの声をかけてくれるらしい。

「よかったなあ、ぼーず！」「よかったわねえ」。ちょっと嬉しそうなずん。本当はもっと喜びたいはずなんじゃないか、ぼくの前だから遠慮してるんじゃないか、ってそのとき思った。そしてぼくは、義足のことで喜んでいるずんに、ちょっとだけヤキモチを妬いていることに気づいた。いや、正確には、ずんにじゃない。ずんの義足に、だ。ずんの顔は、（これはぼくの思い込みかも知れないけど、）ひとりでも立てることへの喜びを表している気がしてしかたなかった。意識し始めたらどんどん悲しくなる。ぼくらはふたりで頑張ろう、って言っていたのに、もうずんはぼくから離れないんじゃないのかな。それは、思いきってここまできて腕をなくしたぼくにとって、最後の追い討ちとも思える悲しさだった。

なんとなく、におわせてしまっていたのかな、と思う。

ずんはぎりぎりになるまで、ぼくにはなにも言わなかったから。

ちなみに団体は、ぼくの所在をも突き止めてきた。もうすっかり忘れ去られたかと思っていたからびっくりした。きつとずん繋がりで見つかったのだろう。ぼくは普通に日本に帰されるらしい。そして日本で義手をつくるのだそうだ。

今日は団体の地区代表のおじさんがうちまで迎えに来てくれた。聞くと、あれから一ヶ月とちょっとが経っているらしい。なんてこった。

流れは止まらなかった。ころころと転がりだして、いびつだったぼくらは、次第に丸くなっていく。ぼこぼこの形のお陰で絡み合っていたぼくらは、いつのまにか引っかかりをなくして、それぞれに転がり始めていた。

ずんは、二本足になる。ぼくも、両腕を得る。

リハビリは、義手義足をつけた後の病院がプログラムとして行ってくれるみたいだ。まるでぼくらが致し方なく一緒にいたかのよう

に、代表のひとは勝手に言い訳をして勝手に弁解してくれた。

ずんとは別の車に乗ることになる。

行き場所が違うのだから当たり前か。防弾になっている分厚い窓ガラス越しにずんの乗り込む姿を見届けた。

「よかった」

「うん？」

代表の人が、車を運転しながら振り返った。「なに？」

「よかった。って、」

「ああ。純くんを探していたら、緑くんも一緒にいるみたいだったからさ。びっくりしたよ」

おじさんにはぼくの言いたいことは伝わっていないみたいだけど、別に構わない。

「……迷惑かけてすいません」

「いや。無事でよかったよ、なにかあったら大変だからね。きみみたいな勇敢な子のことだから、純くんを見つけてほっとけなかったんだろ？」

「勇敢、」

「うん、小学生なのに、てか小学生なんて初めてだよ。いやあびっくりしたんだよ」

代表の人は、ぼくの右腕のことには触れない。

「……ずんは、これから普通に歩けるようになるんですか？」

「ああ……リハビリ次第だけど、こっちなかなかい義足を提供してあげられるみたいだから、少なくとも歩くことに問題はなくなるんじゃないのかな。純くんは運動神経もよかったみたいだし、頑張ればきつとすぐだ。数ヶ月すれば走れるようになるさ」

「そんなに、」

「ああ。もちろん帰ったら、同じように緑くんも……うん。まずは親御さんに話をしなくちゃいけないけどな。別に責めるわけじゃないんだが、……承諾書を頂いてるとはいえ、さすがにこっちも賠償金を請求されても仕方ないようなことだから」

「なんで？」

「いや。親ってそうゆうもんじゃない」

「だいじょうぶです、ぼくが勝手に失敗したんだ。関係ない」

「はは、緑くんがそう言ってもねえ……そういうもんじゃないからねえ」

なんだそれ。笑うことじゃあないんじゃないか。ずんの「しゅっ」なら許せたかも知れないけれど。

「なんです。ぼくが来たくて、ぼくが失敗して、ぼくがずんと住んで、……ぼくが決めたことなのに。かあさんにもとうさんにもいいちゃんにも、あ、じいちゃんにはお金借りたけど……でも、迷惑はかけてないつもりです。それにみんな、地雷をなくそう、って頑張ってるだけなのに、なんでそんな中でも偉いおじさんがうちの親にわざわざ謝ったりしなきゃいけないんだ」

だんだんとむきになってしまった。

代表のおじさんは、困ったような、楽しんでるような、悲しんでるような顔で、笑った。

「それはきみが、こどもだからだよ」

しゅっしゅっ、とどこかから聞こえてくるような気がする。

ずんは、元気？

今日もこっちはくもり空。そっちはどう？ ぴろぴろは聞こえる？

もうあったかいから、あの冬のゲームはできないね。またいつか、勝負しようね。絶対に。

草は増えた？ 花は咲いてる？ ずんの“左足”はどう？ ぼくの“右ウデ”は、なかなか気難しいよ。かあさんが親戚中からお金を集めてきて、ぼくは神経カイトとかいうのをつなぐすんごい機械をウデに入れたらしいんだけど、なんか全然使いづらい。ずんに手を借りていたときの方がずっと楽だよ。だからちよっと、不満。

ずんは満足してる？

今、気づいたけど、満足って、“足が満ちる”って書くんだね。
（漢字、わかる？）だからかなあ、ぼくが満足しきれないのは。…
…なんてね。ずんが本当に“満足”してくれていたらいいなあ。ぼ
くの選んだ団体がやったことでずんがしゅっしゅって言うてくれた
ら、ほんとにうれしいよ。

今度日本に戻るときは教えてね。ぼくもそっちに行くときは言う
よ。会おうね、一緒に歩こう。手をつないで散歩をしよう。約束だ
よ。

早く地雷がこの世界からなくなりますように。
じゃあ、またね。

小刻みに震える右手で書いた手紙を、ぼくは真っ赤なポストに放
り込んだ。曇りのち晴れの天気予報どおり、雲がだんだんと切れて
きている。空は繋がっているんだ。なんかの歌のフレーズで聴いた
ことがある。この空をずうっといけば、あの真っ青なずんの頭上に
たどり着く。そしてこのコンクリートもずうっとたどっていけば、
緑と茶色と季節の匂いと焦げ臭さのまざった地面にいきつくんだろ
う。

帰り道は、ちょっとだけ遠回りをしていこう。緑色の春服を買っ
て帰ることにしようかな。そんでついでに色違いで黄色いのも買っ
ておこう。そう決めたら、ちょっと笑ってしまった。ぼくは両手を
振って歩き出す。

そこには、あったかさの匂い。春の匂い。白とピンクと黄色と緑
の匂い。

しゅっしゅっしゅっしゅっしゅっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7911a/>

ぼくらの満足のつくりかた

2010年10月12日07時10分発行